

2020年9月6日 主日礼拝説教要旨:ダビデ物語 ⑤

サムエル記上 19:1~10 「仲保者ヨナタン」

高井 卿 介

前回(8/9)のサムエル記上18章から学んだことは、大活躍のダビデに対するサウル王の心が妬みから憎しみに、それが敵意となり更に殺意に変わるという悲しい出来事であった。

本日の19章に入ると、その殺意はむき出しになり、もう誰の目にもはっきりと見えてきました。

I. サウル王の焦燥(19:7~10)

本日の箇所冒頭で、サウル王は息子ヨナタンや家来たち全員の前で、ダビデを殺すことを命令します(1節)。それに従って次々と行動に移していくが、それが悉く挫折し、失敗に終わっていく様子がリアルに描かれている。

9~10節には、前回の18:10~11に続いてサウル王は、2度目の槍をダビデに投げて殺そうとしています。その引き金となったのが、前回(18:10)と同じく「主からの悪霊」(19:9)によるものであった。

興味深いことに、このような現象は、決まってダビデの活躍によってペリシテとの戦いに勝利した後に起こっていることである。

このような強敵ペリシテとの緊張関係の中で、神はイスラエルが王国という政治体制を取ることを許され、サウルが王としての地位に就いたが、彼は神の言葉に全面的に従わず、サムエルから「神はあなたを王の位から退けた」(15:26)と宣言されたことは、非常なショックであり、その様な中でイスラエル国民の期待がサウルからダビデに移ったことで、サウルは焦りを感じ、それが彼の精神的病気の進行に拍車をかけたと思われる。

II. ダビデ殺害の実行と失敗(19:11~17, 18~24)

2度にわたる投げ槍によるダビデ殺害に失敗したサウル王は、夜ダビデの家に殺し屋を遣わして、寝床ごと連れ出して殺そうとしたが、妻ミカルの機転によって難を免れた。

また、ラマの郊外ナオトのサムエルの所に避難したダビデを、捕らえる事にも成功しなかった。後にダビデはこの時の事を詩編59編に歌っている。だからその表題に「サウルがダビデを殺そうと、人を遣わして家を見張らせたとき」とある。

III. ヨナタンの執り成し(19:1~6)

①、先ずヨナタンは「彼は父上に対して罪を犯していないばかりか、大変お役に立っている」(4節)と言って執り成している。

②、次に、ダビデがペリシテ人に勝利を得たのは、決して彼の個人的な能力によるのではなく、「主はイスラエルの全軍に大勝利をお与えになったのです」(5節)と、主に栄光を帰している。

③、このようなダビデを殺すことは、無罪の者を殺すことであり、それは大きな罪となると警告している。

このような執り成しをするヨナタンは、私たちと神との間の仲保者となられた、イエス・キリスト雛型なのである。テモテへの手紙 I 2:5